



営農タイムリー！



発生予察情報について(11月)

2021年10月22日発行

病害虫発生予報第9号(11月)

京都府病害虫防除所より、11月の予察情報が発表されました。

病害虫発生予察第9号(11月) (抜粋)

作物名		病害虫名	予想発生量 (平年比(前年比))
野菜	アブラナ科野菜	べと病 白さび病 白斑病 コナガ	並 (並) 多 (多) 並 (やや少) やや多 (やや多)
	キャベツ	菌核病 黒腐病	やや多 (やや多) やや多 (やや多)
	ネギ	ネギアザミウマ ネギハモグリバエ	やや多 (多) やや少 (やや多)
	野菜類	シロイチモジヨトウ	やや多 (やや多)

アブラナ科野菜

1. **べと病**

予報内容 発生量 : 平年並 (前年並)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) **キャベツ**をはじめ、**ハクサイ**、**ダイコン**などの各種アブラナ科野菜で発生し、アブラナ科野菜を連作した場合に発生が多くなる。
- (2) 気温が低く降雨が続く秋から初冬及び春先に発生が多い。
- (3) 肥切れすると発生しやすいので、肥培管理に注意する。

2. **白さび病**

予報内容 発生量 : **平年多い (前年多い)**

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 10～11月の降雨が連続する時期に発生が多い。
- (2) 窒素肥料の過多を避け、水はけを良くする。
- (3) 過繁茂にならないよう適切な播種量を心掛け、間引きを徹底する。

3. **白斑病**

予報内容 発生量 : 平年並 (**前年比やや少**)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 雨の多い年は、初秋から晩秋にかけて発生が多い。
- (2) 強風雨や泥のはね上げは、本病の伝染、まん延を助長する。
- (3) 肥切れすると発病を助長するので、追肥を早めに行う。
- (4) 多湿条件で発生しやすいので、ほ場の排水を良好にする。

4. **コナガ**

予報内容 発生量 : **平年やや多い (前年比やや多い)**

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 年間の発生回数が多く、各発育段階(卵、幼虫、蛹、成虫)が混在する。
- (2) 雨が多いと発生が抑制される傾向がある。
- (3) 雨よけ栽培の場合、降雨に関係なく急速に増殖することがある。
- (4) 被覆資材などを利用し、物理的防除に努める。

キャベツ

1. **べと病**

予報内容 発生量 : **平年比やや多い(前年比やや多い)**

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 発病適温は20℃前後で、曇雨天が続いた時に発生しやすくなる。
- (2) 発生終期に菌核が形成され土中に落ち、次の伝染源となる。菌核は土壤中で2~3年間生存する。
- (3) 発病株は菌核を形成するまでに抜き取り、処分する。

病徴と診断 : 初め葉に周縁が不明瞭な淡黄緑色斑点を生じ、次第に葉脈にくぎられた病斑となる。その後病斑の裏側に汚白色のカビを発生し、病斑が古くなるとカビは褐色となり消失していく。

防除の

ポイント: 薬剤防除は発病初期に重点をおき、葉裏にも薬液が付着するように散布する。また、薬液が付着しにくいので、必ず展着剤を加用する。



キャベツ

2. 黒腐病

予報内容 発生量 : **平年比やや多い(前年比やや多い)**

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 害虫の食痕や風雨による傷口等は細菌の侵入を容易にし、本病の発生を助長する。
- (2) 降雨日数と発生量との相関が高い。
- (3) 台風等による強い降雨の後や害虫の食害が目立つ場合は、早期防除に努める。

病徴と診断 : 葉には葉縁に扇状、中央部では円形・淡黄色の病斑を生じる。その後暗褐色にかわり特に葉脈が黒褐色となる。病斑部は古くなると枯死し、乾燥して破れ易くなる。根頭部では導管部が黒くなり内部も乾腐状となる。被害株は軟化・腐敗したり悪臭を発したりしない。

防除のポイント:

- アブラナ科以外の作物を輪作する。
- キャベツを食害する害虫防除を行う。
- 発病のおそれがある地域では、抵抗性品種を栽培する。



ネギ

1. ネギアザミウマ

予報内容 発生量 : 平年比やや多い(前年比多い)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 年間、10世代以上くり返し、葉の表層を食害し、かすり状の食害痕を残す。ネギでは葉鞘分岐部や葉折れの内側に多く寄生する。
- (2) 本種はアイリス黄斑ウイルス(Iris yellow spot virus:IYSV)による病害でネギえそ条斑病を媒介する。
- (3) 被害葉及び収穫残さが本虫の発生源となるので、残さは一箇所にとめて積み上げ、表面をビニルで被覆する等適切に処分する。
- (4) 本種は、殺虫剤感受性低下が懸念されている。殺虫剤散布後は効果を十分に確認し、感受性の低下が疑われる場合は系統の異なる薬剤を散布する。また、感受性の低下を避けるため、系統の異なる殺虫剤をローテーション散布する。
- (5) 新系統(産雄性生殖系統)と在来系統の殺虫剤感受性は異なるので、新系統の発生を確認している地域(山城及び南丹地域)では注意する。

2. ネギハモグリバエ

予報内容 発生量 : 平年比やや少ない(前年比やや多い)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 幼虫が葉肉部分を加害し、白い筋状の食害痕を残す。
- (2) 産卵から羽化までの発育所要日数は20℃で約36日、25℃で約23日程度である。
- (3) 被害葉及び収穫残さが本種の発生源となるので、残さは一箇所にとめて積み上げ、表面をビニルで被覆する等適切に処分する。
- (4) 1葉あたり1~数匹の幼虫が加害するバイオタイプA(従来系統)とは異なり、10匹以上の幼虫で集中的に加害し、葉を白化させるバイオタイプB(別系統)の発生を確認しているので注意する。

野菜類

1. シロイチモジヨトウ

予報内容 発生量 : **平年比やや多い(前年比やや多い)**

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 本種は齢が進むと、薬剤の効力が低下するので、ほ場をこまめに観察して早期発見に努め、**若齢期の防除を徹底**する。
- (2) 被害葉及び収穫残さが本種の発生源となるので、残さは一箇所にとめて積み上げ、表面をビニルで被覆する等適切に処分する。
- (3) 本種は寄主範囲が広く、ネギ以外に豆類、野菜類、花き類を加害するので注意する。

ネギ シロイチモジヨトウ

形態 : 虫は体長約11mm、開張25~29mmの灰褐色の夜蛾。ヨトウムシ類の中では小型。幼虫は成長すると約30mmで、緑褐色または灰褐色。

防除の

ポイント :

- 中・老齢になると極端に薬剤に強くなるので、薬剤はふ化幼虫期に散布する。



卵



幼虫



蛹



成虫